

“My Kinsman, Major Molineux” と Hawthorne の「行列」への関心

小 田 敦 子

要旨 「私にとって、生命は祭りか葬式かの行列の形で表される」と Hawthorne は言う。「行列」は Hawthorne の作品に繰り返し現われるモチーフである。1850年代の長篇においても、Hawthorne の心理的ロマンスの山場である、深層意識の啓示の瞬間に「行列」が現われる。現実のものと想像とが入り混じるロマンスの「中間地帯」において、New England の歴史に取材した「政治的な行列」は想像上の「意識の流れ」の比喩としての行列と混じりあう。その時「行列」は、ノヴェルではなくロマンスを書くと言った Hawthorne の問題意識や感覚をよく象徴する表現であることを明らかにする。1850年代の作品から読み返してみると、すでに1832年の“My Kinsman, Major Molineux”にこのような「行列」の表現を認めることができる。

「不吉な感情がしばしば行列にはつきまとう」と Eudora Welty は言う。そしてその例証として“My Kinsman, Major Molineux”をあげる。行列には何かが隠されているという不吉な感覚は、主人公 Robin が加わりたと思っていた賑やかな行列が、実は彼が頼る Major Molineux を辱めるものであることを知るという物語の展開からも明らかだ。さらに、ロマンス表現としての「行列」はこの不吉な感情を、疎外感や孤独等人間の生命の問題として呈示する。「行列」というモチーフを通して読むと、“My Kinsman, Major Molineux”は Hawthorne の創作の方法へのイニシエーションの物語になっている。

“My Kinsman, Major Molineux”は最初1832年に雑誌に発表された Hawthorne のもっとも初期の作品のひとつであるが、Hawthorne 自身の短篇集に収められるのは1851年、*The Scarlet Letter*, *The House of the Seven Gables* に続いて出版された彼の最後の短篇集、*The Snow-Image* においてである。*The Snow-Image* の序文で Hawthorne は、「若い時に、人は本当に知り本当に感じている以上に賢明なものを書き、残りの生涯でその若い時の英知を悟り、確信していくものかもしれない。昔、空想でしかなかった真実が、以後、知性と心の実体になったということかもしれない」と言っている。⁽¹⁾ Hawthorne の作品には繰り返し同じテーマやモチーフが現われる。このことは、若い頃に空想を刺激されたテーマやモチーフを Hawthorne が執拗に追求していった過程を示しているが、そのように Hawthorne の関心をひきつけたモチーフの一つに、「行列」“procession”がある。

“My Kinsman, Major Molineux”は、タールと羽を塗られた Major Molineux を引き回すリンチの行列が強い印象を与える作品である。*The Snow-Image* の前に出版された前出の二つの長篇においても、行列が登場する場面は Hawthorne の心理的ロマンスの山場といえるところ、つまり、深層意識が現われ、疎外感や孤独等、不安な意識をかかえた人間の生命の有り様の隠れていた姿が明かされる場になっている。結局、Hawthorne の関心は「行列」というモチーフが持つロマンス表現としての可能性にある。この三つの作品は何れも New England の歴史風俗に取材し、前者は独立革命前の「政治上の行列」“political procession”を、後者のうち *The Scarlet Letter* は植民地時代の、*The House of the Seven Gables* は Hawthorne の同時代の、それぞれ「政治上の行列」を取り上げている。「行列」は Hawthorne の他の短篇、

例えば、1835年には“The Haunted Mind”，“The Gray Champion”，1838年には“Howe’s Masquerade”，1843年には“The Procession of Life”等に繰り返し現われる。これらの短篇のそれぞれでHawthorneの関心は、「行列」の大きく分けて二つの面のどちらかに向けられる。一つは、New Englandの歴史物語に当然出てくるであろう儀式の一種である「政治上の行列」としての側面、もう一つは、行列の動きにみられる「意識の流れ」の比喩としての側面である。長編では、「政治上の儀式」と「意識の流れ」という二つの側面を結びつけることで、「行列」はHawthorne的な深層心理の領域に関わるロマンスの表現を獲得するが、これは、歴史的事実としての行列を、前出の*The Snow-Image*の序文の言葉を借りれば、「空想」の中の行列という独自の次元に変換したところに、起源を発する表現である。ロマンス表現としての行列の起源は、すでに1832年の“My Kinsman, Major Molineux”に認められる。

“My Kinsman, Major Molineux”の舞台であるボストンの街は終始「月の光」に満たされている。「月の光」もまた幾つもの作品に繰り返し現われ、*The Scarlet Letter*の序文のロマンス論の要になるモチーフだが、“My Kinsman, Major Molineux”の「月の光」も見慣れたものに見知らぬ美しさを生み出し、現実のものと想像とがいきりまじる「中間地帯」“neutral territory”を現出させる。その「中間地帯」の中におかれた行列は現実の「政治上の儀式」であるとともに想像上の「意識の流れ」でもあるのだ。月の光に照されたボストンの街を親戚を尋ね歩いたRobinの物語は、物語の全体がロマンスの啓示の瞬間をクローズ・アップするように、終始一貫して行列が物語の仕組みを支えている。

“My Kinsman, Major Molineux”の“political procession”はリンチの行列ではあるが、この物語の歴史的な枠組みからしても、古い権力を倒してアメリカの独立の気運を鼓舞する点で、勝利の凱旋のような祭りの行列と考えられる。短篇“The Procession of Life”の冒頭で、作者は「私にとって、生命は祭りか葬式かの行列の形で表される」と述べている。⁽²⁾ Hawthorneが祭りの行列で思い浮かべるのは“political procession”だが、例えば、戦争の勝利の凱旋にしる、葬式にしる、共に古代から運命共同体がまもってきた習慣である。政治的な行列はそれを構成する多数の人々が示す堂々たる威厳によって、共同体の安定と結束を誇示し、それに支えられた人々の生活と生命の価値を訴え、葬列は死という共通の運命によって、人々の連帯感に訴える。Hawthorneにとって行列が生命の比喩として重要なのは、それが「人々を結びつける絆」を具現するものであるから、人の生命を共同体内の他の人々との関係の中にあるものとして呈示するものであるからだ。

まず、ボストンの街と田舎から出てきたRobinとの対立は、物語の上では終始一貫して、“political procession”とそれに加わっていないRobinという形で呈示されている。RobinがMajor Molineuxの住まいを尋ねては笑ひ者にされていた間にも、行列が作られつつあったことは、Robinが何かわからないままに感知していたタールの匂いや、グロテスクな仮装をした男たち、二度Robinに話しかけられた理解できない隠語めいた言葉等によって暗示される。余所者であり、倒された旧権力者の親戚であるRobinは、当然、共同体を表す行列に入る者ではありえない。しかし、Hawthorneの生命のヴィジョンは、人は他の人々とのつながりのなかで生きるというものであるから、Robinが最初、Major Molineuxを頼りに共同体の中に迎え入れられ、生きていこうと考えていたことは、誇らしげにMajor Molineuxの名を口にしていただけからわかる。行列の中に入っていないRobinは、それ故、「彼の故郷の最も深い森のなかでも感じたことのない激しい孤独の感情」(p.222)に打たれることになる。

この時、Robin は彼が頼んでいた現実を代表する Major Molineux の死を想像する。墓地に象徴される死の世界が立ち現われ、それまでの世界が崩壊して彼の生存が脅かされることを、Robin は全ての関係を断たれた孤独感と感じる。そして、通りの角から行列の陽気そうな笑い声や騒音が聞こえてきた時、それに加わろうとするのは、人々の中で生きようとする Robin の自然な反応といえよう。

生命は関係の中にあると考える Hawthorne の作品のテーマが、孤独であり疎外感であること、*The Scarlet Letter* の Hester や *The House of the Seven Gables* の Clifford 等、行列の中に入れず外からそれを見ている主人公を設定すること。これらは、“The Procession of Life”において、人々を行列に集めるものは何であるべきか、「もっと本当に人を結びつける絆」“a more real bond of union”を求めて、行列の指揮官の方針を検証していった Hawthorne の問題意識の発展した形と考えられる。*The Scarlet Letter* 中の“The Procession”と題された章は、Hester と Dimmesdale が共同体の外、森の中で確かめあった二人の結びつきが壊れていく様を、次のように、共同体に保証された生命を代表する行列に絡ませて描いている。

How deeply had they known each other then! And was this the man? She hardly knew him now! *He moving proudly past, enveloped, as it were, in the rich music, with the procession of majestic and venerable fathers; he, so unattainable in his worldly position, and still more so in that far vista of his unsympathizing thoughts, through which she now beheld him!* Her spirit sank with the idea that all must have been a delusion, and that, vividly as she had dreamed it, *there could be no real bond betwixt the clergyman and herself.* (239-40)⁽³⁾

犯罪者である Hester が、Dimmesdale を含む植民地の支配層の人々の行列に入れないのは当然であるが、加わりたいという気持ち、Dimmesdale と共に生きたいという気持ちはあり、彼女の目は彼の姿を追う。ところが、Dimmesdale の方は無関心であり、それは Dimmesdale が Hester と「共鳴しない思考」“unsympathizing thought”に夢中になっているためだと考えて、Hester は不吉な予感を覚えている。「選挙の日の説教」への没頭をはじめとする、この Hester と「共鳴しない思考」もまた、上の引用の少し前のところでは、「荘重な思考の行列」“a procession of stately thought”と行列の比喩で呼ばれる。Dimmesdale が牧師として指揮する行列は、Hester が二人の間に認めた二人の生命を結ぶ「本当の絆」を罪としてはねつけ、幻想に変えるものとして働く。行列の内と外とで、いつにない活力で行進する Dimmesdale と対照的に、Hester の気持ちは沈んでいく様子が表されている。

Hawthorne は現実の“political procession”が持つ意義を認めたくうえで、そこから疎外された Hester の想う「人を結びつける絆」を呈示するのは、ただ後者を否定するためではないであろう。疎外された人物が提起するのは、“political procession”が生命の本当の絆を全てありのままに表しているか、という疑問である。Eudora Welty は自伝 *One Writer's Beginnings* の中で、「行列にはしばしば不吉な感情がつきまとう」と言っている。⁽⁴⁾ Welty はこの感覚を説明するのに、子供時代サーカスの行列が行進の順路を変更して、ある子供の窓の下を通ったことでその子を羨んだという話をする。まもなくその子は死んで、彼も彼を羨んだ Welty も共に騙されていたという思い、或いは、ハーメルンの笛吹きの話、そして“My Kinsman, Major Molineux”をあげて、賑やかで陽気な行列にもまだなにかが隠されている

と感ずる「不吉な感情」を説明している。生命の中に潜む死、そのために生命と取り違えられる死、この生と死の曖昧性への感受性は、深く Hawthorne のものでもある。前出の“The Procession of Life”の冒頭の言葉、「私にとって、生命は祭りか葬式かの行列の形で表される」もこの感受性に裏付けられたものと言えよう。“My Kinsman, Major Molineux”の行列につきまとう不吉さは、Robin が加わりたと思っていた行列が、実は Major Molineux を辱めるものであることがわかるというプロットからも明らかであるが、祭りの行列とみえるものが葬列でもあるという行列の両義的な性質がロマンス表現としてもつ意味を、前述の *The Scarlet Letter* の引用で Hester が “political procession” に感じた「不吉な感情」を参照して考えてみたい。

Hester が見つめる前を行進していく Dimmesdale が及ぼす「陰鬱な影響力」は、Hester に選挙の日という祝日の行列を悪しき運命の行進と思わせる。そのことは先の引用文の続きで以下のように述べられる。

And thus much of woman was there in Hester, that she could scarcely forgive him, — least of all now, when the heavy footstep of their approaching Fate might be heard, nearer, nearer, nearer! — for being able so completely to withdraw himself from their mutual world; while she groped darkly, and stretched forth her cold hands, and found him not. (240)

見知らぬ遠い人となって Hester の目の前を通りすぎていく Dimmesdale の動きに、Hester はどんどん近づいてくる運命の足音、この場合それは行列の始まる直前に Hester に知らされた Chillingworth の妨害工作を指すが、彼女の生命のヴィジョンを打ち砕く運命の足音を聞いている。ここの表現で注目されるのは、Dimmesdale が通りすぎていくのは現実の行列のことでもあるが、その動きに重ねられた運命の行進は Hester の想像であることだ。行列にまつわる不吉な感情は、人の意識に潜在する死の運命が引出されることに因る。見ている者の意識が行列に投射されて、行列の動きが意識の流れを表現している。

ロマンスは人々の「共通な本性」に問題を見つけると Hawthorne は言う。「共通な本性という地下牢」⁽⁵⁾とも呼んでいるように、Hawthorne にとって、それは人々の「生命の光景」“the scene of life”⁽⁶⁾からは隠されているが、しかし「地下」においては生命を縛り限界を与える運命のことであり、それがより強力に「人を結ぶ絆」として考えられている。したがって、「人を結ぶ絆」を具現する行列とは、いつも潜在的に、人々の無意識にあるものを引出し組織化するものでありうる。

この点について、“The Haunted Mind”の葬列 “a funeral train” は、Hawthorne が行列を意識の流れの比喩として捉えたことの適切さをよく示している。⁽⁷⁾一日の時間の中でロマンスの「中間地帯」といえる時間、つまり日常生活の仕事を離れて眠っているはずの夜中にふと目覚めた時に現われた夢想、それを Hawthorne は「誰の心の深みにもある墓と地下牢」に隠れていた「埋葬者或いは囚人」だと言う。Hawthorne はこの夢想を「意識のある眠り」“conscious sleep”と呼び、表面に現われる陽気な浮かれ騒ぎに隠れた、深層の無意識として、以下のように表現する。

In an hour like this, when the mind has a passive sensibility, but no active strength; when

the imagination is a mirror, imparting vividness to all ideas, without the power of selecting or controlling them; then pray that your griefs may slumber, and the brotherhood of remorse not break their chain. It is too late! A funeral train comes gliding by your bed, in which Passion and Feeling assume bodily shape, and things of the mind become dim spectres to the eye. There is your earliest sorrow....Next appears a shade of ruined loveliness....A sterner form succeeds.... See! those fiendish lineaments.... (306-07)

無意識に潜むものは、「受動的な感性」“passive sensibility”が感受するもの、つまり、人に与えられた運命であり、人の運命を悪しく支配する“Fatality”に打たれたことによる様々な受苦の感情である。この様々な潜在意識が擬人化されて順に立ち現われ、亡霊がすべるように動いていく葬列の描写は、「意識の流れ」の手法といえるものだ。

「想像力がただ受動的に、そこにある意識を映すだけの鏡になる時」という言い方を“The Haunted Mind”の語り手はするが、Hawthorneの描く行列は、それを「受動的に」見る者の意識の流れを映しだすものとして呈示される。ロマンスの主人公は「共通な本性」の絆を表わす行列を「受動的」に見る役割を負っている。「受動的に」、つまり、生命に潜む謎に人がさらされ、それに打たれる時、それがロマンスの啓示の瞬間であるが、その時、表層の陽気な浮かれ騒ぎの行列から深層に潜む葬列まで、深さのある流れとして、行列は、そして意識は、捉えられる必要がある。

The House of the Seven Gables で Clifford が飛び込もうとした“political procession”は、その光景に打たれた「感じやすい’ “impressible person”, Clifford の見たものとして説明される時、以下のように、見る者の意識に対応する深さのある流れとして描かれる。

But, on the other hand, if an impressible person, standing alone over the brink of one of these processions, should behold it, not in its atoms, but in its aggregate——as a mighty river of life, massive in its tide, and black with mystery, and, out of its depths, calling to the kindred within him——then the contiguity would add to the effect. (165)⁽⁸⁾

種々雑多な人々の共通の本性を表現する「一つの生命」を、「黒い神秘の深み」をもった大きな潮がうねる「力強い河」に喩えて、Hawthorneは様々な人々が動いていく行列に具現される重層的な「生命の流れ」の圧倒的な魅力を強調する。そしてそれは憑かれたように行列に見入る者の意識の流れる姿の表現にもなっている。

“My Kinsman, Major Molineux”の最後、タールと羽を塗られた Major Molineux を Robin に会わせた後、再び動きだした行列にふれて、Hawthorneは「生きている流れが彼の横をうねりながら進む時、Robinは本能的に石柱にしがみついていた」“the stone post, to which he had instinctively clung, while living stream rolled by him” (230)と言う。行列はその存在を Robin の目の前に現した時、「生きている流れ」、或いは、「人々の力強い流れ’ “mighty stream of people”と生命の流れに喩えられている。Robinの言動を見守っていた紳士は「夢を見ているのかね」と尋ねるが、月の光に照されたボストンの街を親戚を尋ね歩き、そのような行列を発見した Robin の旅は、行列に表される無意識の世界への旅であったと云える。なぜなら、行列は、彼が尋ね歩いている間にも作られつつあり、しかし彼はそれ

に気づいていないものであるから。

行列が作られる過程に付随して起こる、Major Molineux の名前に対する人々の沈黙と答に代わる笑い、そして、「Robin のような不慣れな耳以外には殆ど聞こえない」と語り手が言う街のざわめきを、何かわからないままに Robin は聞いている。何かわからなくとも、それらは影響力を持っており、そのために Robin はそれまでに経験したことがない、前述の死に連なる激しい孤独を感じる。街のざわめきを聞きつけることから孤独感へ至る経過は、とりわけ「月の光」の効果の中の出来事である点が強調される場所であり、それは即ち、Robin が無意識の中に自己を発見、拡大していく過程であることを示している。そして、無意識が意識化される様子を表すのが「夢が誰かの熱に浮かされた頭から突然吹き出て、目に見える形を取ったかのような」(228)行列の場面である。

“My Kinsman, Major Molineux” の行列は指揮官が二つの顔色を持ち、群衆は各々幾つもの声色を持つという具合に、浮かれ騒ぐ人々の活力にあふれる混乱した騒々しい流れは、「陽気なのか恐怖なのか」(228)わからないままに、つまり、生命の両義性の謎を秘めて Robin に近づいて来る。彼が行列を認識する瞬間は次のように語られる。

A moment more, and the leader thundered a command to halt; the trumpets vomited a horrid breath, and held their peace; the shouts and laughter of the people died away, and there remained only a universal hum, nearly allied to silence. Right before Robin's eyes was an uncovered cart. There the torches blazed the brightest, there the moon shone out like day, and there, in tar-and-feathery dignity, sate his kinsman, Major Molineux! (228)

この行列は音の喧しさに特徴があるが、Robin はその騒音の底に潜む「偏在するざわめき、殆ど静寂と同じもの」“a universal hum, nearly allied to silence” を認識する。これは前に Robin を孤独感へと導いた「Robin のような不慣れな耳以外には殆ど聞こえない」街のざわめきと同じものである。この「眠りを誘う音」に誘われるままのボストンの人々には静寂と聞こえるものを、余所者 Robin の不慣れな耳は、またもう一度、「偏在するざわめき」と聞きつけている。言い換えれば、人々には古い権力の死と新しい権力の誕生をなぞる祝祭の儀式である行列が、Robin には、その指揮官が戦争の化身であり彼の二色に塗り分けられた顔は炎と刀とそれらに伴う喪の嘆きの象徴とみえることが暗示するように、個人を襲う死の運命の行進とみえるのだ。「偏在するざわめき」に続いて、月が昼間のように明るく輝く中で、Robin が Major Molineux を認める時、前には想像であった死につながる激しい孤独の実在が確認される。タールと羽を塗られた Major Molineux の姿が象徴する死の運命、Major と自分自身を取り囲む Fatality に激しく打たれて、Robin は恐怖と哀れみに満身を貫かれる。

この時の Robin の受動的になった感受性は、彼がその夜聞いた床屋からランタン持ちまでの笑い声を、丁度鏡に映したように時間の順序を逆にして、次々たどることで表されている。この部分は“the Haunted Mind” の行列のような「意識の流れ」を示す描写になっており、順に現われる笑い声を行列に加担していたものとして聞く描写は、Robin の意識が自分の生命がおかれていた状況を発見しつつある様を表す。それに続いて Robin が発した他の誰よりも大きな笑いは、行列が隠していたものの発見に伴い彼の意識の根源から浮上した、恐怖や哀れみ等受苦の感情の大きさを語るものだ。The House of the the Seven Gables の中で

Hawthorne は、「生命の最悪最低の面」にふれた時に涙を流す Clifford について、「笑いが持つもっと激しく悲劇的な力」⁹⁾が欠けていると言うが、Robin の笑いには、ただ受けた衝撃に対するヒステリックな反応だけではなく、「もっと激しく深く悲劇的な力」が潜んでいるのではないか。それが悲劇的なのは、行列に現われる「生命の最低最悪の面」に衝撃を受けるとしても、それと関係を持たずにはいられないことを認めているからだ。Robin がついに行列の中に入ったかのように人々の笑いに「感染して」“contagion” 笑ったと言われる訳は、そのような人間に共通の本性への認識にあると言えよう。

一度は加わろうとした行列の、人を飲み込む勢いの流れに抗う姿勢を「本能的に」とる、それが Robin が無意識の世界への旅を通して達した結論である。「本能的に」とはまず大きくは、生きようとする本能を指すものであろう。生きようとする本能が「生きている流れ」に抗おうとするのだが、それは Robin が生命から死への移ろい易さ、生と死の曖昧性を発見したことを示している。行列を囲んで人々が笑っている場で、最後に Hawthorne が雲や月からの視点を仮定して、それを陽気な浮かれ騒ぎと呼ぶのも、行列のすぐ横で Robin が体験した行列が含む重層性を対照的に際立たせる。Robin の本能は、生命に潜みそれを制限するものに抗おうとする。それは即ち、「共通な本性」という絆のもつ否定的な面に囚われることを拒否する姿勢である。そして、これは Robin のもう一つの本能につながる。つまり、余所者としての本能である。

Robin の自己発見を可能にしたのは、街から疎外されたものの意識の過剰である。共同体の中で生きることを望みつつ、行列の指揮官の号令の下で動くには目覚めすぎた意識、つまり、田舎者の Robin が街で知ってしまった根源的な孤独の力が、行列に集められることに対して、それを渴望する以上に、不信の念を起こさせる。余所者であることは、行列の指揮官に対する批判の視点を開く。しかし、行列が「共通な本性」を組織したものであるからには、彼は物理的には傍観者であっても、傍観者的な批判者ではありえない。物語の最後で、性急に田舎へ帰ろうとする Robin が引き止められるのも、Hawthorne が余所者に託した批判の姿勢を反映するものと思われる。Robin が真に “a shrewd youth” (231) であるためには、行列を離れられず、そこに入ることもできない、その世界の中の余所者であることが期待されている。

このような行列に対する Robin の本能、余所者としての姿勢は、殆ど Hawthorne の作家としての本能でもあったのではないだろうか。“My Kinsman, Major Molineux” は「行列」というモチーフによって、青年の社会への initiation の物語を、余所者としての自己を発見する意識の物語にする。そして、そのことによって、この最も初期の作品は、Hawthorne がノヴェルではなくロマンスを創造する感覚や問題意識への initiation の物語となっている。

註

- (1) Nathaniel Hawthorne, *The Snow-Image and Uncollected Tales* (Ohio State University Press, 1974), p.6. “My Kinsman, Major Molineux” の引用はこの版による。以下、引用文中のイタリックスは筆者のもの。
- (2) Nathaniel Hawthorne, *Mosses from an Old Manse* (Ohio State University Press, 1974), p.207.
- (3) Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter* (Ohio State University Press, 1962). 引用文中のイタリックスは筆者のもの。

- (4) Eudora Welty, *One Writer's Beginnings* (Harvard University Press, 1984), p.37.
- (5) Nathaniel Hawthorne, "Ethan Brand," *The Snow-Image and Uncollected Tales*, p.99.
- (6) *The Scarlet Letter*, p.236. この作品の「政治的な行列」を「生命の光景」と呼んだもの。
- (7) Nathaniel Hawthorne, *Twice-told Tales* (Ohio State University Press, 1974).
- (8) Nathaniel Hawthorne, *The House of the Seven Gables* (Ohio State University Press, 1965). 引用文中のイタリックは筆者のもの。
- (9) *ibid.* p.164.

"My Kinsman, Major Molineux" and the "Procession" Motif of Hawthorne

Atsuko ODA

Hawthorne says, "Life figures itself to me as a festal or funeral procession." "The procession" is a recurrent motif in the works of Hawthorne. The romance-novels written in 1850s put "processions" at their most critical scenes, that is, the revelation-scenes where the hidden subconsciousness of the protagonist emerges. Seen in Hawthornesque "neutral territory," the "actual" political procession which appears in the history of New England functions as the "imaginary" one which is the emblem of the stream of consciousness. Then "the procession" like this can present a satisfying expression of Hawthorne's awareness of the problematic as a romancer. It is in one of his earliest works, "My Kinsman, Major Molineux" (1832), that we recognize the first example of this expression.

Eudora Welty says that "an ominous feeling often attaches itself to a procession." She brings up "My Kinsman, Major Molineux" to explain the ominous feeling that something is still hidden in a procession. The mere plot of the story gives a good explanation: the merry procession Robin wanted to join turns out to be that of lynching whose aim is to disgrace his only reliance, Major Molineux. Furthermore the subtle expression of "the procession" allows the ominous feeling to be deepened into the passion of life itself.

Read through the interest in "the procession," "My Kinsman, Major Molineux" initiates us into Hawthorne's art of romance.